「旅遊中国」の特集にあたって

編集部

近年の中国における観光の発展には眼を見張るものがある。中国国内の観光客数は、一九九一年には約三億人、中国国民全体の四人に一人がやっと年一回観光できるという水準だったものが、年二回、一週間の連休となる「黄金週」（ゴールデンウィーク）が始まった一九九九年には七億人、さらに二〇〇六年には一四億人に達した。これは平均して国民一人が一年に最低一回は観光した計算になる。

また、インバウンド観光客が一九八九年の天安門事件や二〇〇三年のSARS流行による一時的減少を乗り越えて増加し、二〇〇五年には四六〇〇万人に達して、中国は世界第四位の観光客受け入れ国となった。世界観光機関（UNWTO）の予測によれば、二〇二〇年には中国の観光客受け入れ数は一億三千万人にのぼり、フランスを大きく抜いて世界第一位になっているという。アウトバウンド観光の伸びも驚異的で、一九九〇年代から平均年率で三〇％を超えるスピードで成長を続けている。日本の旅館・ホテル業界が台湾からの観光客に続いて、大陸からの観光客に熱い視線を向けていることも、しばしば報道されるところである。

本号の特集は、北京オリンピック開催を間近にひかえますます注目度を高める中国の観光について、産業としての側面と文化としての側面の両面から光をあて、その実相を照らし出そうとしたものである。巻頭の座談会は、多彩な顔ぶれの論者によって中国における観光発展の歩みと現状、魅力と課題を論じたものであるが、その中でも産業としての観光と文化としての観光との間の矛盾をはらんだ複雑な相互関係が議論の焦点となっている。これに続く論説は大きく三つの部分から構成されている。

第一の部分は産業としての観光をめぐる論説（インタビューを含む）である。鈴木勝論文が中国の観光発展が世界の観光業に及ぼす影響をマクロの視野で分析しているのをはじめとして、観光の発展を促した国内要因について、梁春香論文は主に社会・経済的背景から分析し、呉継紅論文は制度と政策の変化を中心に分析している。また、王文亮論文は、発展から取り残された農村地域で地域振興の手

段として注目されている「三農（農村、農民、農業）観光」に着目し、各地における実施の具体的様相を明らかにしている。中国観光の重要な担い手である旅行社業については、戴斌論文がその景気動向を統計学的手法で分析している。最後のインタビューは、北京市の観光行政の総責任者に北京オリンピックに向けた観光戦略を語ってもらったものである。これらの諸論説を通じて、私たちは中国における観光の発展を、たんに経済の高度成長の結果としてでなく、改革開放政策そのものと緊密に結びついて展開されてきた一連の過程として理解することができるに違いない。

第二部は文化としての観光にかかわる論説である。中国人が向ける「観光のまなざし」に着目した東美晴論文は、上海市民を対象とするアンケート調査を分析し、高学歴中間層と低学歴下層との間に見られる観光選好の差異を析出している。一方、兼重努論文は長年にわたるフィールドワークに基づき、「観光のまなざし」が向けられた少数民族地域が、「観光の産業化」によって文化、社会組織、政府との関係にいたるまで大きく変容を迫られている様相を描き出す。近年、中国共産党が宣伝に努めている「紅色旅遊」（革命聖地をめぐる旅）について分析した張恩華論文は、この政治的色彩の濃厚な旅行が、実際にはその参加者たちによって本来の目的とは異なった意味合いを含んで実践されていることを指摘している。観光文化の政治利用という問題は、ユネスコを舞台として展開される中国の世界遺産政策を分析した加治宏基論文でも追究されている。

第三の部分は、日本人による海外観光の先駆けともいうべき戦前期の植民地・大陸観光を扱った論説である。高媛論文は、東清鉄道の全線営業開始を背景に、日露戦争中での「観戦旅行」、さらに戦後の「利源調査」旅行へと、満洲旅行への関心が「帝国のまなざし」を伴って高まるさまを描き出している。続く阿部安成論文は、「満韓経営を担える人材養成」を目指した山口高等商業学校の修学旅行の記録を詳細に分析したもので、当時の高商学生たちの眼に大陸・植民地がどのように映じたか、翻って日本を見る眼にどのような変化が起こったかにまで論及している。また曽山毅論文は、植民地台湾における近代観光が鉄道網の整備とともに発展するプロセスを跡付けている。これらの論説を通じて戦前期の日本人が中国に向けた「観光のまなざし」に触れるとき、現代の日本人が示す「中国観光のまなざし」とはどのようなものかを考えずにはおられないのではなかろうか。

中国の観光に関する研究は総じてまだ開拓期にあるといえるかもしれない。しかし、関連する領域は広く、かつ深い。本特集が今後の研究の刺激になることを望みたい。

（砂山幸雄）